

相互行為と関係性

——南部アフリカ狩猟採集民グイの談話と身ぶり

菅原和孝

<要旨>

本論文の中心的な論点は、社会的存在の特性は、関係によってよりも、対面相互行為の構造によってこそ、根源的に理解できるということである。ニホンザルのハナレオスの出会いの分析から、彼らの相互行為の構造は、二者の出会いと三者の出会いのあいだで大きく異なっていることがわかった。前者においては、融通性に富んだ役割選択を通じて現象的親和性が実現されやすいのに対して、後者では、直線的順位序列に基づいた優位者のディスプレイや攻撃行動が誘発されやすい。次に、日本人大学生の三者間の会話（三者会話と略称）の分析から、身ぶりの微細な協働を通じて独特な関係性が現成していることを示す。関係の典型は、社会人類学の出発点となる親族関係である。これは、生殖という自然史的行為と婚姻という社会史的行為の重合によって生成する事実性に基づいているので、エティックなカテゴリーとして記述することが可能である。これに対して関係性とは、対人的な態度を方向づけるイーミックな知覚の枠組として定義される。南部アフリカ、ボツワナに住む狩猟採集民グイの談話において生起する身ぶりの協働と同期を分析することから、「今ここ」の場に現成する現象的親和性を把握することができた。それは、メルロ＝ポンティが暗示した間身体性に根ざすと考えられる。しかし、この親和性は、親族関係にも、参与者たちが言語的に表明する関係性（そのもっとも単純な形は他者の「好き嫌い」に関わる言明である）にも還元することができない。身ぶりの協働や参与者の身体接触といった相互行為の微視的プロセスに注意を払うことは、人びとの言説的実践の底に横たわる非言説的実践の層を照らす有効な通路を与えるだろう。

キーワード：現象的親和性、現成、関係性、身ぶり、間身体性
SUGAWARA Kazuyoshi 京都大学大学院人間・環境学研究科

I 相互行為の構造——序にかえて

1 原点としてのハナレオス

「関係」という概念を見直すためには、霊長類学を専攻していたわたしの出発点に遡行する必要がある。それは、宮崎県の幸島という小さな島での、ニホンザルのハナレオスどうしの出会いの研究である〔菅原 1980〕。当時、わたしはアメリカの社会学者ゴッフマンに傾倒していたので、ニホンザルの行動をパフォーマンスとして記述するという荒唐無稽ともいべき企てに挑戦していた〔ゴッフマン 1974〕。ニホンザル社会では、雄は4～5歳になると生まれた群れを離脱し、別の群れへ移っていく。しかし、幸島のように周囲を海に囲まれた場所では、群れを離脱したハナレオスは単独で島のなかを遊動し、交尾期になると自分の生まれた群れに接近し、雌との性交のチャンスを窺う。群れのなかには4～5頭のオトナオスがいますが、これは優位なハナレオスが群れに侵入し、居座った結果である。

幸島の森のなかを這いずりまわっていたわたしの脳裡に像を結んだ「出会いの構造」の姿を簡単に描いてみよう。群れから離れた場所で2頭のハナレオスが出会っても、敵対的な相互行為はまったく起こらない。それどころか、両者の優劣関係を判断できるような行動もきわめて稀であった。何よりの証拠に、それまでのニホンザル研究で順位確認の行動と考えられてきたマウンティングが起きても、劣位者が優位者の上に乗るという事例が、ちょうど50%ぐらいの確率で観察された。また、マウンティングが起きた出会いでは、両者の毛づくろいもよく起こる傾向があることが確かめられた。つまり、二者の出会いにおいては、マウンティングはある種の挨拶として働いていると考えられる。しかし、この二者的な場に、両者のどちらよりも優位なハナレオスが近づいてくることがしばしばある。すると、状況は一変する。三者の場では、マウンティングの80%以上で、優位者が上に乗るという非対称性が露わになる。それどころか、今まで平和的に共在していた2頭のどちらかが、相手を攻撃することもしばしば起こった。ここからわたしは、ニホンザルの雄の相互行為を理解する鍵は、社会関係ではなく、場の構造それ自体にあると考えた。つまり、二者の出会いと三者の出会いは異質な構造をもった場であり、前者では順位に縛られない融通性に富んだ役割選択を通じて「現象的親和性」が実現されやすいのに対して、後者においては直線的順位を背景にした攻撃行動が発現しやすいのである。

2 インターアクション・スクール

20年以上後に、わたしは拙著のなかで唯一の理論書において次のように論じた。自然選択の基盤をなすもっとも原初的な相互作用は「どく／どかす」ことであり、それは2個体の空間配置の変化として外在的（客観的）に観察できる。しかし、一方の身体が静止した他方の身体を繰り返しつつくという相互作用は、「いじめる」ことにも見えるし、「仲良くする」ことにも見える。身ぶりから湧き出る表情の意味をすでに世界の内側から把握している「身体化された心」だけが、「仲良くする」ことを「いじめる」ことから区別できる〔菅原 2002：110-111〕。今にして思えば、「現象的親和性」とはこのような意味での

「仲良くする」ことに等しい。しかし「仲良くする」は学術用語としては破格なので、いかにも生硬ではあるが、「現象的親和性」という術語をあえて本稿のキーワードとして採用する。

社会的な存在の仕方を根源的に理解する手がかりは、社会関係ではなく対面相互行為の構造それ自体に求められるという主張は当然、強い批判を浴びた¹。その後、「われわれ」の偉大な師・伊谷純一郎は、わたしと志を同じくする幾人かの「若手研究者」たちを「インターアクション・スクール」〔相互行為学派〕と命名し、相互行為の微視的分析をいくら積み重ねても社会構造の解明には行き着かないという意味の警告を発した。

千変万化するインターアクションの世界を泳ぎまわっている彼らにとっては、定点などというものは必ずしも重要ではないのかもしれない。たしかに、性急に学問としての体裁を整えようとするよりも、好きなだけ杵を掘る機会をもつことの意義は納得できる。私がいいたいのは、もうそろそろ堪能したのではないかということと、いまもって学問の全体像が見えてこないのがいささか気がかりだということである〔伊谷 1987：97，2007：453-454〕。

もしも相互行為主義（interactionism）への「われわれ」の傾斜が、社会学でいわれる「方法的個人主義」と多少の類縁性をもっていたのだとしたら、伊谷さんの社会構造論は多分に「社会唯名論」へのモメントを孕んでいたのであろう。「われわれ」と伊谷さんとの少なからぬズレ違いは、今なお人類学につきまとうアボリアと無縁ではなかったのかもしれない。ともあれ、フィールドワークを始めた当初からわたしが「社会関係」という概念に対して強い懐疑を抱いていたことは、以下の論述にとって重要なライトモチーフになる。

3 身ぶりの定義と転写方式

3-1 身ぶりとは何か

以下の分析は、人間の対面相互行為のなかで頻繁に生起する身ぶりに焦点を当てる。そこでまず、身ぶりとは何かを簡潔に定義する。

かつては、非言語行動（nonverbal behavior）に関わる代表的な理論では、人間の身体動作は、標識（emblem）、例示子（illustrator）、適応子（adaptor）、調整子（regulator）、顔面動作（facial action）の5種類に分類され、とくにコミュニケーションの意図が明瞭な標識と例示子が狭義の身ぶり（gesture）として定義された〔Ekman & Friesen 1969〕。

音声言語による情報伝達を身ぶりが補助する、という旧来の考え方に革新をもたらしたのがマクニールによる心理言語学の研究であった〔McNeill 1992〕。そこでは、身ぶりと言話は心という単一のシステムから発生し相互に影響を与えあう自律的な活動であることが強調された。しかし、心理言語学の目標が心のメカニズムを解明することである以上、

1 雑誌掲載された拙論への川中健二のコメントはこうした批判の典型である〔川中 1980〕。これを読んだわたしは、自分の試みのねらいがまったく理解されていないことにひどく落胆した。

分析が精緻化すればするほど、そこに心身二元論が忍びこむことは避けられない。また、実験室で被験者にアニメ映画について語らせるという人工的な手続きのために、身ぶり研究が民族誌的な文脈を欠落させてしまうことは、人類学にとって受け容れがたい限界である。わたしは、身ぶりから湧き出る意味が南部アフリカのカラハリ砂漠に住む狩猟採集民グイの生活世界の民族誌的特質といかに関わっているかを分析することを指針に定めた〔菅原 2013b〕。とくに本稿で注意を向けるのは、手によって行われる身ぶり、すなわち「手ぶり」(gesticulation)である。

3-2 転写資料の書式

煩雑ではあるが、会話と身ぶりの転写資料の書式を説明しておかなければならない。テクニカルな注釈をすれば、日本人の会話分析はグイの身ぶり分析よりもずっと前に行ったので、前者のほうが身ぶり分析の解像度がやや低いことを断っておく。比喩的にいえば、手ぶりにおいて、手はなんらかの「仕事」をするために、ある「休止位置」(home position)から空中へと出かけ、それをし終えて還ってくる。頭や肩の向きや視線が連続的に変化するのとは対照的に、手ぶりの流れは出かけては還る「分節」へと切片化できる。「手の仕事」は、手ぶりの軌跡およびそれが頂点に達したときの手の形状によって達成される。この運動と形状を総合して手ぶりの「形態」と呼ぶ。顕著な形態を出現させるフェーズを「駆動」と、その前後のフェーズをそれぞれ「前駆」「縮退」と名づける。これらはケンドンの“stroke”、“preparation”、“recovery”という用語に対応する〔Kendon 2004〕。またマクニールは最後のフェーズを「撤回」(retraction)と呼んだ〔McNeill 2005〕。前駆とは手が休止位置から上がり始め駆動の態勢を整えるまでの準備であり、縮退とは休止位置に還るまでの道のりである。グイのデータではこの三つのフェーズを区別しているが、日本人のデータでは駆動の位置を示すことしかできなかった。以下の説明の冒頭に置かれる発話または記述は、第II章以下に掲載する事例から抜き出した転写の断片である。

009

(a) カッコの使いわけ

- (a1) ((右こぶしふりあげる))：二重カッコ (()) 内は言語チャネル以外で起きている事柄(身ぶりや動作を含む)の説明。
- (a2) (かけ) 山登ってな：丸カッコ () 内は語句の聞き取りに疑問が残った箇所を示す。
- (a2') (.....) な：丸カッコ内の.....は、この部分の発話が聞き取れなかったことを示す。
- (a3) 3 穀：やさ{しくして}なー
4 健： {あーん }：大カッコ { } 内はここで同時発話が起きていることを示す。また、発話は各行の上に行番号を付し、本文で「3行目」「4行目」などと指示する。
- (a5) [顔を] 上げた／ガマ〔神霊〕か？：ブラケット [] 内には文意を明瞭にする

ため分析者が補った語を挿入する。／キッコウ〔 〕内には注釈やグイ語の和訳を置く。

(b) 沈黙

んで、こう (0.9)：丸カッコ内の数字は 0.9 秒間の沈黙を表す。

(c) 自己接触と他者への接触

(c1) まずい：網かけの部分は、ここで話者が自己接触していることを示す。

(c2) まずい：二重波線は、この発話と同時に聞き手の自己接触が起きていることを示す。

(c3) で彼女を持ち上げる：滴形の圈点は、聞き手の身体に触れていることを示す。

(d) 身ぶりと動作

(d1) 彼女は 立ち 逃げる。エヘエヘ：手ぶりの前駆、駆動、縮退をそれぞれ波線、直線、点線の下線で区別する。

(d2) 彼女は生きていた。：二重下線は、手ぶりの形態が保持されていることを示す。

(d3) どうにも抜けれなくなってから：丸い圈点は、ここで発話者以外の参加者が身ぶりを行っていることを示す。そのあとの下線は発話者自身の身ぶりを示す。

(d4) 彼女は↓生きていた：下向きの矢印(↓)は瞬間的な身ぶりや動作の生起を示す。下線と共に用いるときは、身ぶりの形態や運動に顕著な変化が生じたことを示す。

(d5) C：_____：空白部分の下線は、発話せずに身ぶりだけしていることを示す。

(d6) 俺たちは>アエック<：不等号で挟んだ箇所、顕著な姿勢変化が起きたことを示す。

(f) 発話の特徴と言語学的情報

(f1) 残るといふな：鎖線の下線は、笑いながら発話していることを示す。

(f2) 穀：まず新歓でな→：右向きの矢印(→)は穀の発話ターンが次行に続くことを示す。

(f3) あんたたち [m, pl]：キッコウ内の m, f, c はそれぞれ人称代名詞の男性形、女性形、通性形を、pl は複数形を示す。

II 関係性の現成

1 現成という概念

第I章で提起した問題をさらに掘り下げるために、本章では日本人の三者会話の1シーンを分析する。ただ、その前に、一つだけ特殊な用語を導入する。

前述の理論書〔菅原 2002〕を書いていた頃、わたしが影響をうけた本に、オートポイエシス理論の創始者の一人であるヴァレラ、プロトタイプ理論の総合を成し遂げた認知心理学者ロッシェらが共著で書いた『身体化された心』という奇妙な著作がある〔Varela et al. 1991〕。ここで、かれらは、竜樹が創始した中観派の禅の実践と認知科学とを結びつける風変わりな試みを展開した。そこでかれらは「認知主義」(cognitivism)と呼ばれる

考え方を批判する。認知主義は、わたしたちはあらかじめ色、形、音といった属性を具えた世界に棲んでおり、主体がそれらの属性を心のなかに復元するという世界／主体の描像を基本前提とする。しかし、ヴァレラたちは、「認知」とは所与の世界に関する表象を心が受動的に受け取るのではなく、世界－内－存在が遂行する世界と心の同時的な生成であると考えた。この生成をヴァレラたちは enactive（名詞は enaction）という標準英語から逸脱した用語で表す。訳語としては、齋藤と喜多が身ぶりを主題にして編集した論文集のなかで援用した「現成（する）」^{げんじょう}という仏教用語こそがふさわしい〔齋藤・喜多 2002〕。この語はハイデッガーが多用する独特の用語 west（Wesen〔本質〕という名詞を動詞として用いた三人称現在単数形）の訳語としても用いられている〔ハイデッガー 1994：106 他多数；同訳者注：346〕。以下では、この現成という語を、もっぱらヴァレラ的な「生成＝制定」の意味で用いる。

2 大学生の三者会話

以下で分析する VTR 資料は、わたしの以前の勤め先であった北海道大学の学生の会話を、当時、卒論研究をしていた学生が撮影したものである〔菅原 2010：119-124〕。

【事例 1】マゾっ気

- 1 毅 んで、こう、やっぱり、こう（ひー）^①新歓期ておれらすごいねんな
（（①右手あげひねりながら下へ））
- 2 健 ああ
- 3 毅 ふつう^②新歓期ってゆうたら、ま、だいたい、こう→（（②右手をあげておろす））
^③やさしくやさしくして}なー（（③両掌を自分のほうに向け振る））
- 4 健 {あーん }
- 5 毅 んで、こう（^④0.9）（（④両手を向かい合わせ細かく振動させる））
- 6 由紀 どうにも^⑤抜け{れなくな}ってから }
- 7 毅 {^④続れなくな}ってから}^⑥こう（（⑤両手を上げ、掌を向かい合わせ
てから、前方に向けつつおろす））（（⑥両手を向かい合わせ右側へ何かをほうり投
げる身ぶり））
- 8 健 あーん
- 9 毅 (.....){(.....)な}まず^⑦新歓でな→（（⑦右人さし指立て、左手を膝から離す））
- 10 由紀 {うーん }
- 11 毅 →^⑧ひとり1升瓶くらい（で）焼酎持って→（（⑧右こぶしふりあげる））
- 12 毅 →（^⑨かけ）山登ってな^⑩ガー1升瓶くらい飲まされるわな
（（⑨右人さし指立てる／⑩瓶を左手で支え右手で瓶の先を握りラッパ飲みす
る所作））
- 13 由紀 へえー
- 14 毅 んで（^⑪だから）そのー マゾっ気のあるやつだけが残ると^⑫いうな→
（（⑪右前方で両掌を向かい合わせて振る／⑫由紀左に倒れこみすぐ起き直

る))

15 毅 →^⑬ここまで鍛えられてもついてくるいうねー

((⑬両手を向かいあわせ振ってから、右側へ何かをほうり投げる身ぶり))

16 ((健／由紀：笑 1.2 ↓^⑭)) ((⑭本文参照))

17 由紀 君は？ ↓^⑮ ((⑮本文参照))

18 毅 {(^⑯/^⑰まずい)} ((⑯毅はうつむき左手で顔を覆いこする))

19 由紀 {あれ？ } ((⑰由紀は左手で左側頭部の髪をなでる))

毅は北大の学生サークル「山スキー部」について話している。冒頭の「新歓期」というジャーゴンは学期初めの新入生歓迎の時期のことである。

5行目で毅がことばにつまると、毅の正面にすわっている由紀は「どうにも抜けれなくなってから」とひきとる。そのことばを自分でも復唱してから毅は9～15行目にかけて比較的長いストーリーを語る。その大意は「新入生歓迎コンパでは、一人が1升瓶の焼酎を持たされて山へ駆けのぼり、ガーッと飲まされる。だから、マゾっ気のあるやつだけが〔部員として〕残る。ここまで鍛えられてもついてくるやつだけが〔残る〕」というものだ。これに対して、由紀は健ともども笑いころげたあとに、17行目で「君は？」と問いかけ、毅は左掌に顔をうずめる（「まずい」と呟いているようにも聞こえる）。

この他愛ないおしゃべりをゴッフマン風に素描すると、次のようになる。自分が関心をもっている女の前で、自分たちバンカラ学生がいかにもむちゃくちゃなことをしているのかを語ることは、男にとって独特な晴れがましさを伴う自己呈示の方法である。それは「野蛮なふるまいに及ぶ男」対「それにあきれる女」というジェンダーの差異を強調することによってその場に潜在していた「関係性を露呈」する機会になった、云々。

このスケッチは間違いではなかろうが、相互行為それ自体の微細な複雑さを捉えるにはまだ大雑把すぎる。まず、約1秒の間の部分で、毅がことばにつまり、両手を胸の前でもどかしそうに振動させはじめたとたん由紀が適切なことばを発し、毅はそれをユニゾンし、しかも二人はほぼ同型の身ぶりをした(④、⑤)。さらに、その後も毅はことばを呼びだす認知的努力の補助手段として「両手を向かい合わせて振動させる」身ぶりをういている(⑪)。もっとも興味ぶかいのは、由紀の毅へ向けた二度の指さしである。最初は、笑いながら毅を右手で指さすが、これはすぐひっこめられる(⑭)。おそらくこのとき由紀は毅が自分のほうに目を向けていないことに気づいたのだと思われる。すぐに、いたずらっぽく「君は？」と言いながら由紀は毅を指さし(⑮)、上目づかいに彼を見つめて微笑んだ。おもしろいことに、さっきすぐひっこめられた由紀の指さしでは、彼女は手の甲を上にしていたのに対して、2回目の指さしでは掌のほうを上に向けている。直示の身ぶりそれ自体が、感情的ニュアンスの微妙な変化に連動するかのように、刻一刻と形態を変えているのである。

これらの微小なレベルでの身ぶりの協働のことなど、参加者はおそらく意識していなかったであろうし、ましてや何年も先まで憶えているなどということはいないだろう。また、観察者としてのわたしは、「彼らはその後も長く友情を育んだだろう」とか、

あるいはもっとロマンチックに、「じつは穀は由紀に惚れていたのだろう」などといった憶測に耽ることを禁欲しなければならない。一つだけいえることは、こうした無意識的な身体の協働が、「社交の愉しみ」と呼ばれるような、社会的存在の基盤をつくっているのだということ、つまりそれこそが「今ここ」の場になんらかの「関係性」を現成しているということである。もし、彼らがこの先何度も会う機会があったとしたら、きょうのこの関係性は次の出会いをある形で方向づけるだろう。すなわち、個々の相互行為と関係性とのあいだには、「造ると同時に造られる」という循環が作動しているのである。この循環こそ、われわれ相互行為学派が、けっして忘れてはならない出発点なのである。

III グイにおける関係性

1 民族誌的な基礎情報

ここで舞台を、わたしの主要なフィールドである南部アフリカのカラハリ砂漠に移す。主人公になるのは、ブッシュマンと総称される狩猟採集民の一言語集団であるグイ (glúí) という人びとである。グイは近縁のガナ (gllana) と共に、中央カラハリ動物保護区内でほぼ自給自足的な狩猟採集生活を送っていたが、1979 年よりボツワナ政府の遠隔地開発計画によりカデ (Xade) 地域に定住するようになった [田中 1994]。また 1997 年には再定住計画により動物保護区からの立ち退きを強いられ、カデから 70 km 西にある再定住村コエンシャケネ (Kx'ôê-sà-kene 別名 New Xade) に暮らすようになり、現在に至る [丸山 2010]。

グイとガナを含むコイサン諸語には、子音としてクリック吸入音を用いるという音韻論的特徴がある。グイ語の場合には、4 種類のクリックそれぞれに 13 種類の伴奏音が結合するので、合計 52 種類のクリック子音が産出される [Nakagawa 1996]²。文法についていえば、基本的には、主語＋目的語＋述語という日本語とよく似た語順をとる。また、人称代名詞の体系が非常に複雑で、話者と聞き手のそれぞれの排除／包含という二つの次元に加えて、数および性を表す次元が区別されるので、合計四つの次元で組織されることになる。それぞれについて可能な値のほぼすべてが代入されるので、「完備パラダイム」に近い語形変化を生み出す³。さらに、三人称代名詞の語尾は接尾辞に転用されるので、人間や動物の性と数について高い弁別力を発揮する [中川 1993]。

2 関係と関係性

さて、再び関係について考える。わたしは勤務先の大学で社会人類学に関連する科目を教えている。社会人類学にとって「関係」(relation, relationship) は不可欠の概念である。

2 わたしは、1998 年から現在に至るまでに出版した著書・論文でグイ語を表記する際には、中川裕がその初期の調査に基づいて考案した正書法を用いていた [Nakagawa 1996: 121-122]。だが、その後、中川は複数の音韻学的な理由からこの正書法を改訂する必要性を指摘し、新しい表記法を提案した [中川 2004]。本稿では折衷的な策をとる。中川のきわめて節約的な母音の表記は、わたしの聴覚印象とあまりに食い違うので、以前の正書法に従う。また、声調を表す記号は一般読者には煩雑な印象を与えるので、適宜省略した（とくに高平調を無標とした）。

3 ただしグイ／ガナ語の一人称単数は性を区別しないので、これだけが完備性を損なっている。

人類学のあらゆるフィールドワークは、現地の人びとの親族関係を把握しなければ、一歩も先に進めることができない。親族関係の基底をなすのは、任意の男女が性交して子どもをつくるという「自然史的行為」と、特定の男女間の性交を正統化する社会的制度のもとで二人が「結婚する」という「社会史的行為」とが重合した事実性 (factuality) である⁴。

しかし、関係をあまりにも自明な事実と考えると、「関係の物象化」という錯誤に導かれる危険性がある。その典型が、人類学でつとに有名な「冗談／忌避関係」という二元論的なモデルである。このモデルは、もともとラドクリフ＝ブラウンによって、アフリカ伝統社会の対人関係を律する原理として提唱された [ラドクリフ＝ブラウン 1975]。その後、マーシャルは、ボツワナ北西部からその西に隣接する南西アフリカ (1990 年にナミビアとして独立) にかけて分布するクン (!Kung —— 現在は自称名ジュホアン Ju'hoan で呼ばれる) における先駆的な研究で、かれらの社会関係のコードを冗談－忌避関係によって解き明かした [Marshall 1976]。さらに、1950 年代から 60 年代初頭、まだボツワナが英国の保護領であった時代に初めてグイの体系的な研究を行ったシルバーバウアーは、「適合の三角形」(congruent triangle) という考え方を定式化した [Silberbauer 1981]。つまり、もし A と B が冗談関係で結ばれていれば、第三者 C に対しては、A と B のそれぞれが同じ関係をもつ。冗談関係を「+」、忌避関係を「-」の符号で表せば、{A, B} = +, {A, C} = + であれば、必ず {B, C} = + となり、{A, B} = +, {A, C} = - であれば、必ず {B, C} = - となる。すなわち、三つのダイアドの積は正の値をとる。ただし、シルバーバウアーは三者すべてが忌避関係にあるような場合を考慮に入れていないが、そうした場合もあることは明らかである。たとえば、{父、娘、息子} の場合がそうだ。このモデルにおいては、交叉のオジ／オバ (MB, FZ) とオイ／メイのあいだの関係を除けば、隣接世代の忌避が一般原則なので、父は、娘・息子双方と忌避関係にある。いっぽう、後者は異性キョウダイどうしなので近親相姦禁忌が適用され、当然、忌避関係になる。この場合 3 ダイアドの値の積は負になる。

こうしたモデルの罣は、あたかも現地の人びとがこうした「規則」を内面化し、つねにその規則またはプログラムに従って、日々の対人的ふるまいをロボットのように自動的に選んでいるかのような錯覚を起こさせがちなことである。わたしは、日常会話の構造を厳密に分析することによって、「遠慮」や「遠慮会釈のなさ」といった態度の特性を、間身体性の基盤に据えて理解することの必要性を強調した [菅原 1998: 126-128]。

ところで、言語学者パイクが提唱し、文化人類学に輸入されていつとき流行した区別にエティック (etic) とイーミック (emic) がある [Pike 1967]。ただし、前者を外部的から「客観的 (科学的) 説明」、後者を現地の人びとの「主観的解釈」というふうに対立させることは、言語学概念の人類学への誤った輸入である。未記載の自然言語を究明する言語学者は、必ず、国際音声字母 (IPA) というエティック・カテゴリーを用いて「音声

4 自然史的行為と社会史的行為の区別は野家啓一による。以下は該当部分の引用である。「自然史的行為とは、「歩く」、「食べる」、「飲む」、「獲る」あるいは「性行為」のように、われわれの自然史的能力に基づいた行為を意味する。それに対し「社会史的行為」とは、「挨拶する」、「売買する」、「契約する」、「ゲームをする」等々のように、一定の規則あるいは社会的規範に従うことによってはじめて成立するような行為のことである」[野家 1993: 175]。

学的な (phonetic)」記述を行う。それと同時に、彼 (彼女) は、当該言語共同体の成員たちによる音素間の差異の弁別を「音韻論的な (phonemic)」分析によって明らかにする [D'Andrade 1995 : 18-19]。すなわち、エティックとイーミックは相互に車の両輪のように働いており、どちらか一方が欠けたら、異文化の生活形式を解明する企てを開始することさえできない。

このことを銘記するならば、自然史的行為と社会史的行為の重合に基づく事実性の集積である親族「関係」とは、エティックな観点から同定できるカテゴリーであるとみなすことができる。わたしは、社会「関係」という語一般をこちらの意味で使いたい。注意しなければならないことは、グイがそうであるように、「関係」にあたることば＝概念をもたない社会は珍しくない、ということだ。日本人は、「関係が壊れる」「関係がもつれる」といった隠喩にあまりにも馴染んでいるので、具体的な相互行為のパターンを社会関係へと還元したり、逆に、昇華したりして理解しがちである。だが、「関係」概念をもたない社会で調査を行う人類学者は、この種の物象化の誘惑に対して自覚的でなければならない。

それに対して、現地の人びとが自ら知覚している対人的なふるまいの枠組 (またはスキーマ) が、おそらく必ずある。それを「関係性」(relational frame) と呼んで区別するのが便利かもしれない。わたしの指導する大学院生たちの論文を読むと、頻繁に関係性ということばが出てくるが、わたしが「関係」と「関係性」はどう違うのかと尋ねると、だれも答えられない。「いや…なんとなく関係性のほうがカッコいいから」ぐらいの認識しかもっていないのである。しかし、関係性が当事者の知覚するかぎりでの (イーミックな) ふるまいの枠組であるかぎり、それは現地語となんらかの対応をもつに違いない。グイでいえば、ウオクアハ (ùō-ku-à-há) とドアオクアハ (gʰòāʔò-ku-à-há) の区別がそれにあたるだろう。前者は、「キョウダイどうしである」さらに拡張すれば「血縁親族である」という意味で、後者は「交叉イトコどうしである」さらに拡張すれば「友人である」という意味になる。わたしは自分と調査助手たちの間柄をなんとなく「友人」として捉えていたのだが、あるときわたしが調査助手キレーホに性的な話題をふると、彼は眉間に皺を寄せてわたしの腿をさすりながら、こうたしなめた。「スガワラ、おれたちは〈キョウダイどうし〉なんだから、そういう汚い話しをするのは良くないんだぞ。」⁵

このキレーホのことばから推測すると、ウオクアハとドワオクアハという二つの概念は、従来の二元論的なモデルで「忌避」／「冗談」と名づけられた区別と緩やかに対応しているのかもしれない。しかし、現地の人たちと親しく話し、かれらの打ち明け話に耳を傾け、そこから関係性に関して当事者が言語化した知覚を把握したとしても、そこから社会的な存在仕方について十分に深い理解が得られるとはかぎらない。もっとも単純な関係性についての発話としては、「わたしはだれだれが大好きだ」(cìrè X-mà gllāmā-há) あるいは逆に「大嫌いだ」/ (cìrè X-mà ɣérō-há) といったものがある⁶。のちに、こうした発話と相互行為とのあいだにどんな関わりがあるのかを考える。

5 キレーホとタブーカはそれぞれピリとヌエクキューエという兄弟の長男と次男である。どうやら、わたしは、ヌエクキューエの「息子」として位置づけられているらしい。

6 ここに示したのは交替形 (進行形といってもいい) である。「大好きだ (愛する)」、「大嫌いだ (嫌う)」の原形は、それぞれ、gllām と ɣérō である。

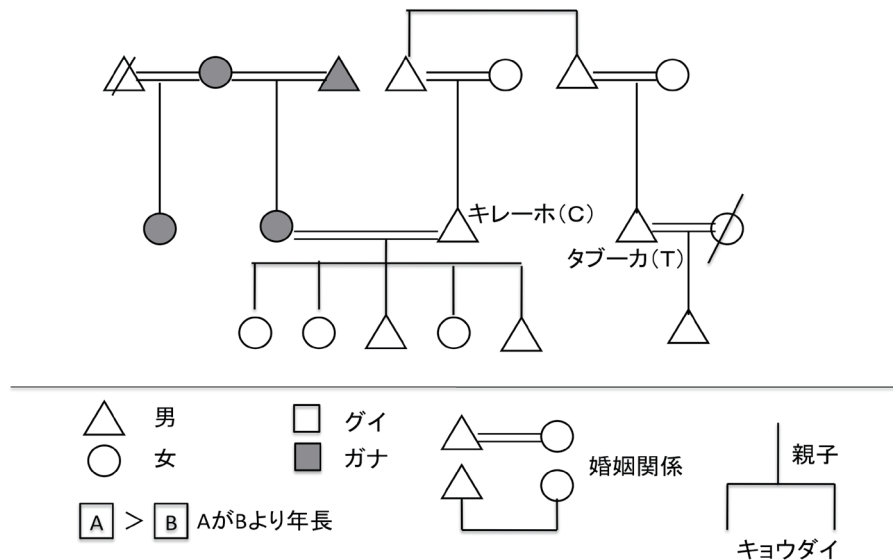
IV 関係性と身ぶり

1 分析の対象になる語り和社会関係の概略

第 III 章での議論を前提にして、本章では関係性と身ぶりとの関わりについて考える。

2008 年 8 月 6 日の午前中に、再定住村コエンシャケネの隅にある「日本人キャンプ」で、定住化以前の思春期に経験した出来事を調査助手タブーカが約 80 分間語った。タブーカの右隣にキレーホがすわり、ときおり口を挟んだ。この語りの大きな特徴は、一人称としてタブーカが一貫して男性双数の *ɔ̃tsibi* ——つまり「俺たち二人」を用いたことである。これを和訳では「俺たち」と略記する。この人称代名詞の選択は、父方平行イトコの関係にあるタブーカとキレーホが、語られた出来事のほとんどを共に体験したことを反映している。

そこで、二人の親族関係を確認し、のちの議論で重要になるポイントを挙げる。グイの人びとは、彼らより農牧民との接触が深く文化変容が進んでいるガナの人たちと密接な関係をもってきた。経済的には、ガナにはヤギ放牧に携わったり雨季には小規模な農耕を営んだりする、比較的裕福な人が多い。ガナの男がグイの女を妻にめとめることはかなり多いが、その逆は稀である。つまり上位集団の男が下位集団の女を妻にする「昇婚」の傾向が顕著だ。しかし、キレーホは、珍しいことに、ガナの有力者の娘に求愛し、1988 年頃から、ガナのキャンプに「婿入り」した形になっている。これに対して、タブーカは、1989 年にグイの娘を妻にめとったが、彼女は若い男児を一人残し、1994 年に結核で急逝した。それ以来、現在に至るまでタブーカはやもめ暮らしを続けている（図 1）。



図中の説明は図、1、3、4に共通

図1 キレーホとタブーカを中心にした簡略化された系譜図

分析の素材として五つの出来事をめぐる語りを選んだ [菅原 2013b]。これらの語りからタブーカの手ぶり分節のすべて、計 117 例を抽出した。以下の分析では二つの出来事 (O と M という略号で表す) だけを取り上げ、他の語りの内容を解説することは省略する。

出来事 O: 巣のなかで卵を抱えているミミズクを見つけたが、全然動かないので死んでいると思って持ち上げたら、逃げてしまった。

出来事 M: 年長の男ツアビーがウィルデビースト |ee (以下聴覚印象で「ツェー」と表記) を斃し、喉の渇きを癒やすために胃の内容物 (糞) を飲んでいるのを遠望したら、髭が糞まみれでとても人間とは思えなかった。

本題に入る前に、上記 117 例の分析結果から、手ぶりの基本的な意味作用を概括する。

2 手ぶりの意味作用

手ぶりはけっしてコード化された記号ではないが、そこになんらかの意味作用が直感される場合がしばしばある。それを、指標性 (indexicality)、類像性 (iconicity)、喚起 (evocation) の 3 種類に分ける。指標性の典型は「指さし」(pointing) であり、人さし指の突出パターンが不完全である場合を「指し示し」と呼んで区別する。指さしも指し示しも「直示」(deixis) という同一の働きを担っている。要するに、手から発射される指向線が空間的距離を跨ぎ越して、指示対象とのあいだに隣接関係を現成するのである。

これに対して、類像性とは、手の形と世界の事物や事象とのあいだになんらかの類似性が感じられる場合である。この二つの働きが直感されないすべての場合に、スペルベルの象徴表現論の核をなす「呼び起こし」(喚起) という用語をあてることにした [スペルベル 1979]。喚起について体系的な分析を行うことは今後の課題である。

まず「直示」について簡単に触れておく。第一のパターンは対人直示である。たとえば、今ここの場にいるキレーホを示し、過去にミミズクの卵を取ったのが「このキレーホ」であることを表す。もう一つの直示が対象を示すものだが、過去の出来事を語る場合、そのほとんどは今ここの場には存在しない。すなわち、かつて彼らが身を置いていた「虚環境」に存在していた対象が示されるのである。

類像性はきわめて多様な例を覆うので本稿ではその詳細は省略する。大雑把に言えば、それらは三つの類型に分けられる。第一は、明確にイディオム化された、標識に近い手ぶりである。その典型は、グイにとってもっとも重要な獲物である羚羊類の種類を頭や角の形を模して表示することである。また、語り手自身の身体に回帰する手ぶり、すなわち、唇に指を当てたり、口や胸もとを押さえたりする手ぶりは、沈思黙考や驚愕 (狼狽) といった心的状態を表示する。第二は、「登場人物の視点」(character's view) からなされる手ぶりである。たとえば、両腕を肘の所で曲げて交互に動かすことは、人が走るときに生じる手と腕の運動を写し取っている。このタイプの手ぶりは、とくに、〈仕留めた獲物の腹の皮をナイフで切り裂く〉、〈火起こし棒を錐もみする〉、〈肉塊をかつぐ〉、〈骨を割り骨髓をつまんで食べる〉、〈槍を投げる〉といった、生業動作の再現において非常によく見られた。第三は、観察者の視点 (observer's view) をとる手ぶりである。たとえば、人さし指と中指をチョキの形のように立てて、2 本の樹が並んで立っていることを表す。また、

人差し指を斜め下に向けて円を描くことにより、ツェー（ウィルデビースト）に攻撃された人が木の下へ逃げこんだら、ツェーは〈木の周りをぐるぐる回った〉というように、動物の運動様態を表す。こうした視点の区別はマクニールの提案したものであるが[McNeill 1992]、分析した語りにおいては、「観察者の視点」をとる手ぶりはごく稀で、「登場人物の視点」をとるものが圧倒的多数であった。次節では、本稿の主題に関連する事例に焦点を絞る。

3 身ぶりの協働

以下の事例では、T、C はそれぞれタブーカとキレーホを示す。まず、出来事Oをめぐる談話の一断片を分析する。

【事例2】ミミズク〔Cのほうが主に語っている〕

- 1 C ^①ミミズクは抱卵し横たわる俺は彼女を握る。(0.2)
- 2 T で{彼女を持ち上げる。}
- 3 C {^②↓で彼女を持ち上げる。}(0.7) いったい物は^③ミミズクのように↓見える、で死んでいるように{見える。}
- 4 T {ように}見えるが。なんと彼女は*↓生き{ていた。}
- 5 C ^④↓ {なんと}彼女は生きて^⑤いた。
- 6 T (0.4) けれど{彼女は立ちそして逃げる。}
- 7 C ^⑥ {けれど彼女は(……)握る}と↓(0.3)それから彼女を持ち上げて置く↓
^⑦彼女は立ち逃げる。エヘエヘエヘ

((①Cは左手を伸ばしTの掌を上に向けた右手に近づけると、Tは親指を立てる。Cは人差し指と親指でTの親指をつまみ保持する／②CはTの手を彼の胸より上まで引き上げ、そのまま保持するが、徐々に下がる／CはTの手を離しその上でつまむ形をとり、掌を上向きに返して保持する／④Tの左親指をつまもうと親指と他の指を対向させて近づけるが、*↓の位置でTが手ぶりをするので、掴めない／⑤掌をTの右掌の上で広げて保持する／⑥Tの左親指をつまんで上下させる／⑦左手を自分のほうへ戻し真っすぐ上に振りあげ、縮退は顔へ向かい、笑いながら口に拳を当てる))

キレーホはとっさにタブーカの親指をミミズクに見立て、〈そっとつまみ上げる〉様を演戲している。しかも①でキレーホが左手を伸ばすと、あたかもその企てに協力するかのようにタブーカは自分の親指を立てたのである。そのあと、キレーホは④で再度タブーカの親指をつまもうとするが、このときタブーカが小さな手ぶりをしたために「取り逃がして」しまう。だが、⑥では再びタブーカの親指をつまむことに成功したのである。グイの身ぶりは個人の身体の周囲に閉じているわけではなく、他者の身ぶりや発話に入り交じり、自らの表現のリソースとして他者の身体を自在に利用するのである(図2)。

次に、出来事Mを取り上げ、タブーカとキレーホが、語りから立ち現れる過去の環境、



図2 【事例2】におけるキレーホとタブーカの身ぶりの協働

つまり虚環境を共同で探索する様子に注目する。

【事例3】俺たちを見た

- 1 T (1.0) けれど彼は (0.4) 横たわる そしてで 俺たちの 話す声を聞く。
((頭を右に大きく傾けると、左指さしの形で垂直に振り上げまっすぐ下におろす))
- (0.2) そうしてでそれから [顔を] 上げた。(0.1)
- 2 C で (0.1) 腹ばいになった。
- 3 T (0.5) で うつぶせでで 俺たちを見た。(0.5)
- 4 C 俺たちを見た。
- 5 T 俺たちは >アエツ< (1.2) アツ (0.6) ア あんたたち [m,pl] ! ガマ [神霊] か? →
- 6 いったいなんだ? (0.5) ((前傾していたが、身をすくめ、胸の前で両腕を交叉))
- 7 C そう言う。

手ぶりはきわめて短いものだが、注目すべきはそれに後続する部分である。彼らが今すわっている場所から見えるのは、見慣れた日本人キャンプの「庭」にしかすぎない。だが、その現実の風景の向こう側に彼らは虚環境を立ち現れさせ、驚きと恐れに満ちて身を乗り出し、その奥を覗きこんでいるのである。

転写資料は省略するが、このような虚環境の共同探索は二人のあいだに見事な身ぶりの同調を呼び起こした。【事例3】の部分よりも前に、二人が獲物の血痕を発見したくだりをタブーカが語っているとき、キレーホはタブーカの指し示しと見事に同期して、右方向（絶対方位としては南）を指さした。「今ここ」に立ち現れた過去の出来事において、ツァビーはほんとうに、彼らが血痕を発見した地点よりも南の方角にいたのかもしれない

い。

【事例3】に続いて、タブーカは、ツァビーの髭が糞まみれになっていた様子を自らの頬や顎へ触りながら語った。さらに、両の掌を上に向けて膝の上に並べ、上体を深く前傾させてこの掌に顔をつっこみ獲物の〈胃袋のなかの液体を飲む〉様を演戯し、「ズズズ」と啜る音を再現した。一方、キレーホもタブーカと同じように正面を向き、両手を口の周りにあてた。この出来事のなかでもっとも顕著な事象である「糞まみれの髭」が期せずして二人によってこの場に現成されたのである。

しかも、この出来事の終結部では、彼らの肝を冷やしたツァビーは、気前よく肉を分けてくれた。驚くべきことに、タブーカはまったくキレーホに視線を向けていないにもかかわらず、〈足もとにある物をかきまわす〉ようなキレーホの手ぶりと寸分違わぬ手ぶりを一拍遅れて始めたのだ。過去の出来事に全身を投入することによって、二人の身体はおのずから世界に対する同一の理解を共有したのであろう。こうしたセンスの共有ほど、メルロ＝ポンティが提起した間身体性（intercorporéité, inter-corporeality）という概念にふさわしいものはない。

4 間身体性

メルロ＝ポンティは、「間身体性」を厳密に定義したわけではなく、その遺稿の中心概念である「肉」（*la chair*）と密接に関連した媒介項として暗示しているにすぎない。この議論は「すべての視覚には、根本的なナルシスムがある」という洞察から説き起こされる。

（中略）私は自分が物によって見つめられていると感じ、私の能動性は受動性と同一だということになる、——それがナルシスムの第二の、しかもより深い意味なのだ。つまり、自分の住みついている身体の輪郭を、他人が見るように外部に見るのではなく、むしろとりわけ、外部によって見られ、外部のうちに存在し、外部に移住し、幻によって誘惑され、捕獲され、疎外されるということ、その結果、見る者と見えるものが互いに逆転し、もはや誰が見、誰が見られているのか分からないようになる、ということなのである。われわれがさっき肉と呼んだのは、この〈可視性〉、〈感覚的なもの自体〉のこの一般性、〈私自身〉のこの生得的な無記名性なのであり、そして知ってのとおり、伝統的哲学には、そのようなものを名指すための名前はないのである [メルロ＝ポンティ 1989: 193]。（原文を参照し一部改変 [Merleau-Ponty 1964: 181]）

さらに、2 ページ前で、メルロ＝ポンティは次のように書きつける。

（中略）見えるものの自己自身への関係があって、それが私を貫き、私を見る者として構成しているのだとすれば、私がそれを作ったのではなく、むしろそれが私を作っているこの循環、見えるものの見えるもの⁷へのこの巻きつきは、私の身体と

同様に、私以外の他者の身体をも貫き、生気づけうることになる（中略）。もし見えるものがその断片の一つに捕獲されるがままになっているとすれば、捕捉原理〔ともいうべきもの〕が得られ、その領野は他のナルシスたち、つまり「間身体性」（intercorporéité）のために開かれているのである〔メルロ＝ポンティ 1989：195〕。（原文を参照し一部改変〔Merleau-Ponty 1964: 183〕）

なかなか難解であるが、先のヴァレラたちの議論と連関させて単純化すれば、主体が属性を具えた世界を一方的に見ているわけではなく、知覚という出来事において、複数の匿名の身体に世界のほうが巻きついてくるのである（捕捉原理 *le principe de la captation*）。すなわち、私と他者とは、離散した身体に閉ざされて存在しているわけではなく、世界の「肉」であるところの共通のサンス（*le sens* 意味＝感覚＝方向性）に向かって開かれている。以下では、「間身体性」をこのようなサンスの共有と解して分析を進める。

5 変身と伝染

相互行為から現成する間身体性の特徴を照らす別の事例を検討する。この事例の民族的な背景はかなり複雑である。まずグイとガナンの食物禁忌について触れなければならない。グイ語には *ŋ/lāā*（ナー）という独特な意味をもった他動詞がある。交替形は変化して *ŋ/lēnā-há* になる。たとえば、*cirè sùrè-sà ŋ/lēnā-há* は「私は煙草を吸わない」——もっと正確には、「吸うと病気になる」という意味である。〈ナー〉に「物」を表す派生辞〈ホ〉をつけると、*ŋ/lāā-xo* 〈ナーホ〉という名詞ができる。つまり「食べる（摂取する）と病になるもの」である。なかでももっとも重要なナーホが〈ショモ〉（*sumo*）である。老人と幼児だけが食べることを許された動物で、センザンコウ、アフリカオオノガン、クロエリノガン、ヒョウガメ（大きな陸ガメ）、カラハリテントガメ（小さな陸ガメ）がこれにあたる。なかでも、アフリカオオノガンは過去のグイの儀礼に重要な役割を果たしていた鳥で、〈ショモ〉のプロトタイプだといえる〔菅原 2004, 2012〕。

分析する事例では、わたしたちは横並びにすわっている。いちばん左にわたしがいるが、ビデオの画面に入っていない。次いで、年長の調査助手ギュベ（ガナン人）、まんなかにはこの場での語りの収録を依頼した老人カオギ、いちばん右にキレーホがすわっている。収録したのは2006年だが、分析は2008年に行った。このインタビューでカオギは過去にライオンが人間を殺した話をしてくれたが、そのなかに登場したキマ（*cimā*）という難解な語の意味を確定しようとわたしは苦労した。キマは月経をもつという女の特徴と結びついた魔力らしいのだが、同時に〈ショモ〉のタブーを侵犯することとも関係があるようだ。この場面では、ある少年が〈ショモ〉を食べてしまったがゆえに発狂した経緯が語られた。簡単に粗筋をまとめると、以下のようになる。

7 わたしは別稿でこの箇所を引用し、「見えるものの見えるものへの巻きつき」では意味が通らないので、二番目は「見る者」の誤記ではないかと推測したが〔菅原 2010：273-274〕、原文は“cet enroulement du visible sur le visible”となっており、まさに訳文どおりである〔Merleau-Ponty 1964: 183〕。メルロ＝ポンティ自身が“le voyant”〔見るもの〕を“le visible”〔見えるもの〕と誤記したのではないかと疑うのは、わたしの誤読なのだろうか。確信がもてない。

少年の父親たちが仕留めた *g#eu* (デウ：アフリカオオノガン) の肉を鍋で煮ていたら、手羽肉が一つこぼれ落ちた。少年がそれを拾って食おうとしたので、父は「おまえは発狂するぞ」と止めたが、少年は反抗した。「あんたたち年長者は、自分たちが脂を食いたいものだから、無害な肉を〈パーホ〉〔咬むもの、つまり猛獣〕だと言って、おれたちに食わせないんだろう」。父は息子を叱りとばしたが、少年のオジは「そんなことを言うやつは勝手にさせろ」と言って、彼が肉を食うにまかせた。翌朝、少年は、デウのような鳴き声をあげ、手をばたつかせて走り去り、別のキャンプに行った。そこの年長者に「煙草をよこせ」と言ったので、年長者は「ガキのくせに何を言うか」と叱ったが、少年はクア (ブッシュマンの総称) のことではなく、バントゥ系農牧民 *ɛbè* (テベ) のようなことばでしゃべりだし、年長者を呆れさせた。つまり、発狂して異言を話したのである。

【事例 4】デウをまねて (G：ギュベ、C：キレーホ、Q：カオギ)

- 1 G 彼は^①↓突如走りだす。こう彼は言うてから。②彼は走る。アウッ、アウッ、アウッ→
((①左手で右手を強く叩く／②上半身を左方向に振り曲げ右腕をまっすぐ伸ばし指さす))
- 2 「アエッ、男の人をあんたたち [*c,pl*] 見ろよ。(0.8) 彼はデウをまねてるぞ」→
- 3 そして遠くへ走ってるから父親は「言う」「ウオッ！ おれは昨日彼に話したのに→
- 4 あのガキは耳の穴がないから、彼をほうったんだ。彼は気が狂って走ってるぞ」→
- 5 (0.7)「でも、おまえたち [*m,pl*] 彼を、追えよ。おまえたちは同い年なんだから」→
- 6 彼を追い、彼を追い、彼を追い、彼を追う。彼は言う、彼は言う。③こんなふうに→
- 7 彼は手をこんなふうにして、このように彼は翼を、④彼は行ってそれ [*f*手] を→
- 8 こんなふうにする。デウをまねて。デウを、それをこんなふうにして、⑤こんな→
- 9 ふうにして(+)((③肘をかるく曲げて両腕を左右に広げ、掌を下に向け両手を上下
に素早く 10 回ほどバタつかせる／④両腕をぴんと張って左右に広げて静止する／
⑤右側に上体を傾けることにより、伸ばした両腕が観察者から見て右下がりの直線をつくる))
- [ギュベは、少年が別のキャンプに走っていき年長者に煙草を要求するくだりを語り続けるが、省略する。]
- 10 C あの人死んだ男だ。デウが殺した {(.....)}
- 11 G {この男の人は} 気が狂っている
- 12 C デウが彼を殺した
- 13 Q デウが{彼を } {殺した}
- 14 G {デウが}彼を {殺した}
- 15 C まさにあのように言うとおりに、デウが^⑥鳴く{声を^⑦人びとは }→
- 16 G {(それ [*f*] でかれらは...)}
- 17 C 知っていた。⑧彼はあのようにして、で (0.8) アオッ、アオッ、アオッ」と言うて→
((⑥両手の人さし指を両耳孔につっこむ／⑦両手を上に広げてから掌を下に向けて強く振りおろす／⑧両腕を広げ、掌を下に向けて素早く十数回バタつかせる))

- 18 C →^⑨それから行って、で、こんなふうにして、[人びとは] 言った、「エヘーイ、→
((⑨両腕をまっすぐ伸ばし、上体をやや前傾させる))
- 19 ^⑩デウを、彼は、ほら、盗んで、それを食ったから、そいつが彼を殺した」
((⑩右手で左方向を思い入れたっぷりに指さす))

上記の事例よりもずっと前だが、発狂した少年の逸話が語り始められたとき、分析者の心をうつような場面があった。まんなかの老人カオギのいかにも楽しげな様子である。ギュベとキレーホが昔の話を思い出したとき、カオギは笑ってキレーホのほうに向かって上体を傾けた。さらに、キレーホが、発狂してテベ（農牧民）の歌を歌った少年のことを思い出したことに触発されて、ギュベも「ケナーマシの弟だ」とその少年のことを想起した。この瞬間、二人はいかにも意気投合したように握手しあったのである。何よりも圧巻なのは、上の事例の③～⑤でギュベが現成したデウの羽ばたきと滑空を、⑧と⑨でキレーホもあいついで現成したシークエンスである。彼らの間身体性の奥深くには、この鳥の鳴き声と羽ばたきや滑空する姿が沈殿しているかのようである。少年が発狂によって鳥に《なった》ことを語る語り手の身体もまた幾分かは変身しているものであり、その《なること》(*devenir*)⁸は別の語り手の身体へと伝染していくのである〔ドゥルーズ & ガタリ 1994〕。

このような相互行為の構造からは、冒頭でニホンザルの研究を例にひいて言及した「現象的親和性」が明瞭に立ち現れる。しかし、この親和性は、関係にも関係性にも還元されないようにわたしには思える。次章でそのことを論証する。

023

V 現象的親和性と表される関係性とのあいだの齟齬

1 キレーホとタブーカの関係性

第IV章での観察を、関係性という概念と繋げて考えてみよう。まず、タブーカとキレーホとが平行イトコ（つまり彼らの親族名称ではアニ・オトウト）として子どものときから一緒に暮らしてきたという事実的な「関係」の沈殿によって、彼らはきわめて深い間身体性を育んできたと考えられる。それこそが無意識的なレベルでの身ぶりや手ぶりの協働を生成する母胎となっているのであろう。しかし、この間身体性は、彼らが言語的に表明するイーミックな知覚とは必ずしも一致しないのである。

その証拠に、わたしが1996年8月（事例で分析した談話を収録する12年前）に経験した出来事を想起しよう。このとき、わたしはキレーホを定住地カデに残し、タブーカと、もっと若い調査助手カーカとを連れて、20kmほど離れた原野のキャンプに移住していた

8 邦訳では「生成変化」と訳されているが、わたしはこの訳は大仰で誤解をまねくと思うので、あえて《なること》と訳した。ただ、それは、子どもがおとなになり、青年が老人になるような生物学的な過程からは区別しなければならない。男が恋する女の太腿を締めつけるストッキングの感触を想像するとき、彼は幾分かその女に《なって》いる。《なること》こそ、資本主義の巨大な内閉に生きる人びとが孕んでいるもっとも豊かな潜勢力であるが、それは優越的存在から従属的存在への非対称的な転移でしかありえない。おとなは子どもに《なる》、男は女に《なる》、あるいは狩人は動物に《なる》可能性につねに開かれている。

人びとのもとを訪れ、数日間だけ滞在した。この年は雨季に野生のスイカ (llañ) が大豊作だったために、乾季になっても、それらが腐ることなく草原にごろごろしていたため、定住地を遠く離れても水分補給に不自由しなかったのである。キレーホがわたしのそばにいないというめったにない状況を待ちかねていたかのように、タブーカがわたしに言った。

「キレーホは、ちゃっかり妻の家に住んでいるくせに、『おれには家がない、家がない』
 と言っては、おれを呆れさせた。やもめのおれ自身には寝る家さえないというのに。おれ
 は彼が大嫌いだ。スガワラはこれからもキレーホを雇うつもりなのか？」

このことばに、わたしは大きな衝撃を受けた。たとえ、子どものときから青年期まで一緒に暮らしてきたにせよ、おとなになってからキレーホとタブーカの境遇は大きく隔たってしまった。恵まれた立場にあるキレーホに対して、タブーカは根深い妬みを抱いていたのだ。この「妬む」(nuō ヌオ)という感情動詞はグイの社会生活のなかでとても重要な役割を担っている。それは、文脈によって「羨む」「惜しむ」などとも訳し分けられるが、精確に言えば、「欲望の対象がみずからの手に入らないことをくやしがる」ことである。このような「現地の人」の「打ち明け話」と、われわれが相互行為の直接観察から把握するかれらの間身体的な現実とのあいだには大きな隔たりがあることは確かだ。

2 カオギ、ギュベ、キレーホの関係

次に、事例 4 に登場したカオギ、ギュベ、キレーホの親族関係を辿ってみよう（図 3）。系譜図からわかるように、カオギとキレーホたちとの関係はかなり遠く、実際、過去の遊動生活のなかでも異なる地域に住むことが多かったようだ〔菅原 1988：1098〕。

また、ギュベの社会的立場はかなり特異である。彼は、動物保護区の東北約 120km に位置するギョムの出身で、かつてはキレーホの母の妹と結婚していたが、わたしの調査が始まった 1982 年より前に妻に先立たれていた。その後、別のグイの女と再婚したが、彼女は、1989 年に他地域に出奔し、ギュベとの婚姻関係を解消した。彼は天才的な騎馬獵の名手だったので彼と同じキャンプに暮らす人びとは大量の肉の恩恵にありついていた。それどころか、彼自身の語った生活史によれば、この肉を誘因として多くの女たちを誘惑し、華やかな恋人関係を繰り広げてきた。また、1992 年頃には系譜上はキレーホたちの

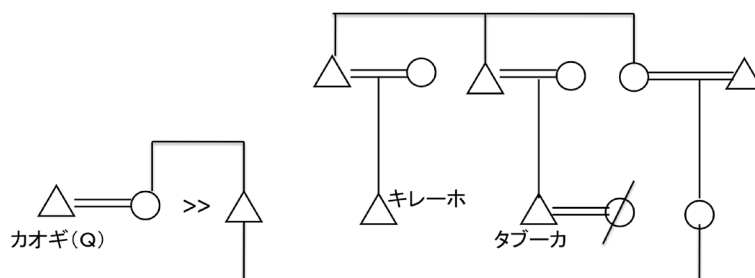


図3 カオギとキレーホ／タブーカとの系譜関係。
二つの不等号は非常に大きな年齢差を示す。

オバにあたる若い娘（ギュベにとっては自分の娘と同じ隣接世代にあたる）と、世代を越えた結婚を敢行し物議を醸した。ギュベの狷介かつ傲岸不遜な性格を嫌う人は多く、現に、タブーカはしばしばギュベのいない所で、彼への不快の念を洩らしていた。キレーホもまた、普通の意味で彼と「親しい」とはいえない。

ある社会における人びとの関係性を明らかにしようとする人類学者が、もしも、親族関係に深く規定され、理念型として語られがちな「態度」（冗談／忌避関係はその特化した形である）や、親しい友人たちの「打ち明け話」——たとえば「おれはあいつが好きだ／あいつが大嫌いだ」といった発話——だけを主要な一次データとするのであれば、彼（女）はけっして相互行為それ自体のなかに宿る現象的親和性の輝きに気づくことはないだろう。

VI 非言説的な実践へ向けて——結論にかえて

いささか唐突だが、小論のまとめとしてフーコーをひきあいに出そう。パリ5月革命の勃発より2年前に刊行された『言葉と物』は、認識の徒として労働するわたしたちの「知」の成り立ちを考えるうえで、測り知れない啓示に満ちている〔フーコー 1974〕。フーコーは、彼の思考の中心に「言説」という概念を置き、「知の考古学」という方法を提唱した。以下は、わたしなりに単純化をほどこした理解である。

「知の歴史」をある種の時空連続体としてイメージすることができる。ある時代・社会の知の総体を規定する枠組は、必ずしも考古学的な層序のように水平方向に切り出せるわけではなく、時間軸に対してある傾きをもって構築される。それを台座として模式化するならば、そこには言説という無数の結節が散在し、それら結節相互間には、引用・参照・脚色・批判・再構築など、多様な論理操作の関係が張りめぐらされている。一口でいえば、「知の台座」（*épistémè*）とは表象の巨大な網状組織として模式化できる。

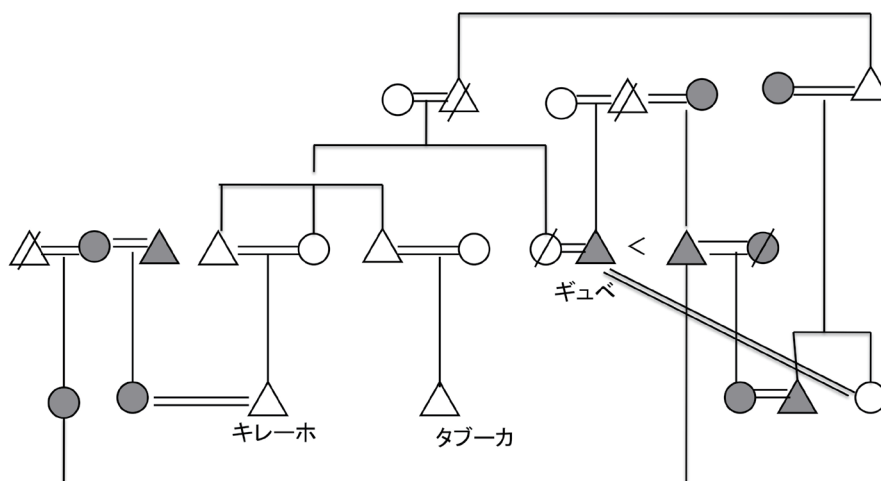


図4 ギュベとキレーホ／タブーカとの系譜関係

何よりも重要なことは、このネットワークのなかに、ある種のニッチェが成立することである。このような位相空間を「概念空間」(conceptual space)と呼ぶことができる。フーコーが突きつけるもつとも恐るべき洞察は、ある概念空間にすっぽり身を置くことによって、わたしたちは初めてなんらかの問題を思考することができる、ということである。さらに衝撃的なことに、私たちが現在「人間」とか「人類」とか呼んでいる全体性こそが、こうした概念空間の一つとして近代の黎明期において初めて成立したということだ。この特異な概念空間の内部はまた幾つもの亜空間に分節化されてゆく。フーコーに直接教えを受けたこともある分析哲学者デビッドソン（著名なドナルドとは別人）の優れた分析によれば、フロイトの精神分析を主要な偶力として、セクシュアリティという概念空間のなかに「倒錯」、さらにそれと相補的に「正常な性」という亜空間が生まれたのである〔Davidson 2001〕。

『言葉と物』は黙示録的ともいえる印象的な予言で終わっている。つまり、もうすぐ人間という概念は波打ちぎわに描かれた砂の顔のように消滅するであろうというのだ。フーコーの思想は、人文学に携わるすべての者たちに、深刻な反省を突きつける。わたしが「相互行為」や「身体性」といった問題にこだわることもまた、現代社会の深層に横たわる「知の台座」に誘惑されているにすぎないのではないか。そのような不安がかき立てられるのを抑えることはできない。

フーコーの提唱する「知の考古学」では、「言説的实践」が「非言説的实践」から厳密に区別される。前者は、歴史的に決定された諸規則によって条件づけられた匿名的な言表機能の行使として定義されるが、後者については、言説の諸編制を取り巻き、それらの一般的要素として役立つもの、とするだけで積極的な定義は与えられない〔フーコー 1970：181, 240〕。わが国では、赤川学がこれに倣い、セクシュアリティをめぐる彼の歴史社会学はあくまでも言説的实践だけを分析対象にすると言い切っている〔赤川 1999〕。しかし、わたしはここであえて、偉大なるフーコーに抗ってみたい。相互行為学派にコミットした者はすべて、フーコーとは逆方向に舵を向けざるをえない。本稿が明らかにしたように、言説的实践が照らす関係性の世界は、わたしたちの社会的な存在仕方のほんの一部（氷山の一角）にしかすぎないのである。非言説的实践としての身ぶりに着目してはじめて、わたしたちはこの氷山の全体像に迫ることができるのではないだろうか。この道を進むことによって、わたしたちはフーコーが消去しようとした「人間」にもう一度出会えるのかもしれない。そのような仄かな希望を未来に託して小論を閉じる。

<追記> 小論は、日本女子大学・学術交流研究シンポジウム（2012年9月22日）「ことばと身体性：社会における他者との関わりの構築」で読み上げた草稿を改訂したものである。シンポジウムの主題に合わせて、当初、発表タイトルを「関係性に埋めこまれた身ぶり」としたが、本稿はより論旨に合致させるため改題した。

<参考文献>

赤川学 1999 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房。

- 伊谷純一郎 1987 「コメント2 新しいコミュニケーション論に向けて」(シンポジウム「コミュニケーションの進化——サルからヒトへの連続性と非連続生について」)『季刊人類学』19(1):95-111(『伊谷純一郎著作集 第一巻』平凡社、2007、pp.451-468に再録)。
- 川中健二 1980 「コメント2」(菅原「ニホンザル、ハナレオスの社会的出会いの構造」への)『季刊 人類学』11(1):71-76。
- ゴッフマン、アーヴィング 1974 『行為と演技——日常生活における自己呈示』石黒毅訳、誠信書房。
- 齋藤洋典・喜多壮太郎 2002 「『ジェスチャー・行為・意味』の編集にあたって」齋藤洋典・喜多壮太郎編『ジェスチャー・行為・意味』共立出版、pp.v-xi。
- 菅原和孝 1980 「ニホンザル、ハナレオスの社会的出会いの構造」『季刊 人類学』11(1):3-70。
- 1988 「セントラル・カラハリ・サンにおける訪問者と居住者の社会関係と対面相互行為——!Koi!kom 定住地での訪問活動の観察より」『国立民族学博物館研究報告』12(4):1031-1111。
- 1998 『会話の人類学——ブッシュマンの生活世界 II』京都大学学術出版会。
- 2002 『感情の猿=人』弘文堂。
- 2004 「失われた成人儀礼ホローハの謎」田中二郎他編『遊動民』昭和堂、pp.124-148。
- 2010 『ことばと身体——「言語の手前」の人類学』講談社。
- 2012 「動物を人間の接触領域における不可視の作用主——狩猟採取民グイの談話分析から」『Contact Zone』5:19-61。
- 2013a 「身体化の人類学へ向けて」菅原和孝編『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者』pp.1-40、世界思想社。
- 2013b 「過去の出来事への身体への投入——グイの身ぶり論序説」菅原和孝編『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者』世界思想社、pp.254-284。
- スperlベル、ダン 1979 『象徴表現とはなにか——一般象徴表現論の試み』菅野盾樹訳、紀伊國屋書店。
- 田中二郎 1994 『最後の狩猟採集民——歴史の流れとブッシュマン』どうぶつ社。
- ドゥルーズ、ジル&ガタリ、フェリックス 1994 『千のプラトー——資本主義と分裂症』宇野邦一他訳、河出書房新社。
- 中川裕 1993 「グイ語調査初期報告」『アジア・アフリカ文法研究』22:55-92。
- 2004 「グイ語の正書法改訂案」『東京外国語大学論集』67:125-130。
- 野家啓一 1993 『言語行為の現象学』勁草書房。
- ハイデッガー、マルティン 1994 『形而上学入門』川原栄峰訳、平凡社。
- フーコー、ミシェル 1970 『知の考古学』中村雄二郎訳、河出書房新社。
- 1974 『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社。
- 丸山淳子 2010 『変化を生きぬくブッシュマン——開発政策と先住民運動のはざままで』

世界思想社。

メルロ = ポンティ、モーリス 1989 『見えるものと見えないもの』 滝浦静雄・木田元訳、みすず書房。

ラドクリフ = ブラウン、アルフレッド・レジナルド 1975 『未開社会における構造と機能』 青柳まちこ訳、新泉社。

Davidson, Arnold I. 2001 *The Emergence of Sexuality: Historical Epistemology and the Formation of Concepts*. Cambridge, M.A.: Harvard University Press.

D'Andrade, Roy 1995 *The Development of Cognitive Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ekman, Paul & Wallace V. Friesen 1969 The Repertoire of Nonverbal Behavior: Categories, Origins, Usage and Coding. *Semiotica* 1: 49-98.

Kendon, Adam 2004 *Gesture: Visible Action as Utterance*. Cambridge: Cambridge University Press.

McNeill, David

————— 1992 *Hand and Mind: What Gestures Reveal about Thought*. Chicago: University of Chicago Press.

————— 2005 *Gesture and Thought*. Chicago: University of Chicago Press.

Merleau-Ponty, Maurice 1964 *Le visible et l'invisible*. Paris: Gallimard.

Marshall, Lorna 1976 *The !Kung of Nyae Nyae*. Cambridge, M.A.: Harvard University Press.

Nakagawa, Hiroshi 1996 An Outline of |Gui Phonology. *African Study Monographs, Supplementary Issue* 22: 101-124.

Pike, Kenneth L. 1967 *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. The Hague: Mouton.

Silberbauer, George B. 1981 *Hunter and Habitat in the Central Kalahari Desert*. Cambridge: Cambridge University Press.

Varela, Francisco J., Evan Thompson & Eleanor Rosch 1991 *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. Massachusetts: The MIT Press.

Interaction and Relational Frame:
Oral discourse and gesture of the G|ui foragers in southern Africa

Kazuyoshi SUGAWARA

Keywords: phenomenal intimacy, enaction, relational frame, gesture, inter-corporeality

The central claim proposed by this article is that the essential characteristics of social existence, either human or non-human, can be more fundamentally comprehended in terms of the organization of face-to-face interaction than of the social relationship. The organization of interaction between solitary males of Japanese macaques in dyadic encounters basically differs from that in triadic encounters: phenomenal intimacy is apt to be realized in the former, while a dominant display or aggressive interaction based on the linear ranking order among males tends to develop in the latter. In a case of triadic conversation among Japanese university students, minute coordination of gestures, such as gesticulation or pointing, ‘enacts’ a singular aspect of ‘relational frame’ among the participants, where ‘enaction’ means the simultaneous emergence of the world and being-in-the-world in Varela’s sense. Kinship, the point of departure for any investigation of social anthropology, most typically exemplifies the social relationship in general. Kinship relations can be described in terms of etic categories, since they are based on the factuality of people’s lives that generate from the coupling of natural-historic acts, intercourse and reproduction, with social-historic act, conjugal linkage and alliance. On the other hand, relational frame is defined as some framework of emic perception that orients interpersonal attitude in particular directions. The correlation of relational frame with the corporeal aspect of interaction was examined by analyzing gestures occurring in oral discourses observed among the G|ui former foragers inhabiting the Central Kalahari Desert in Botswana, southern Africa. The signifying function of the G|ui gestures are classified into three types; indexicality, iconicity and evocation. Observations on the sequential processes of gestural coordination between a narrator and a hearer revealed that some kind of phenomenal intimacy was enacted in a “‘here-and-now’ context of the narrative. However, this intimacy is reducible neither to kinship relations nor to the relational frame that would be indicated by such a verbal statement as “I like/dislike him.” Analyzing the microscopic process of nonverbal interaction concurring with oral discourse, such as gestural coordination, synchronization, physical contact, and so on, illuminates a deep layer of inter-corporeality underlying both the relationship and the relational frame. Inter-corporeality is defined as the shared sens, i.e., triadic unification of meaning, feeling, and direction, of the world, and toward the world. This perspective opens a pathway to the silent stratum of non-discursive practices that has long been ignored by the Foucauldian archaeology of knowledge.